慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バグダードの文化とその滅亡(上)
Sub Title	Baghdad, its culture and downfall (1)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.1 (1955. 4) ,p.15- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550400-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バグダードの文化とその滅亡（上）

前嶋信次

一、序　言
二、建設の規模
三、東城と西城
四、政情の變遷
五、文化の醞釀
六、蒙古史料に現われたバグダードの特産品（以上本号）
七、蒙古軍來襲に關する資料
八、蒙古軍のバグダード攻略の事情
九、カリフ、ムスタアスィムの最期
一〇、結　語

一　序　言

アッバース朝の首都としてのバグダードがフラグ汗の率いる蒙古軍のために灰燼の巷に化し去られた事は種々の意味で重大な事件であつた。その際の攻防戰に參加したのは、アラブ、ペルシャ、トルコ、モンゴル、シナその他諸々の民族で、それらが敵味方に入り交つたのであるから、殺伐な戰爭の中からも、なお東西文化交流史の研究上尊重すべき記錄を若干殘しているのである。

殊に、彼我の記錄を對照し得ることのために、一方的史料では理解し得ない興味ある事象を知り得ると思われる。すべて、長安やバグダードの例でよく理解される如く、當時の大帝國の首府として、數百年間に亙つて文化の中心となつていた大都會でも、不幸にして潰滅的破壞の運命に遭遇すると、人も物も共に滅び去り、文化的遺產まで殆どあげてこれと運命を共にするために、その滅亡當時の記錄と云うものは驚くほど僅少なのが普通である。五百年間西アジヤの中心として、所謂サラセン文化の所產を蓄積して來たバグダードの滅亡の記錄も勿論さして豐富には無い。ことに、地元たるペルシャ人、アラビヤ人の記錄は意外なほどに乏しいのであるが、その一面、中國文獻中に、ほとんど根本史料とも見得るものがあることは興味の深い事實である。

次の一篇は右の如き東西の史料を比較してバグダードの文化の特殊性と、その滅亡の意義とを明かにしようとしたものである。從つて直に本論に入るべきかも知れないが、その前に、バグダードの歷史の概要、特にそのイスラーム文化史上の意義を一通り敍述するのも無益ではないと思う。

二　建設の規模

豫言者ムハンマド Muḥammad がアラビヤ、ヒジャーズ地方の名邑メッカに生れてイスラム教を唱道し、それによつて有史以來初めての半島の統一事業を行つて以來、政治、經濟、文化各方面の中心となつたのは、メッカの北にあたるヤスリブ Yathrib のオアシスであつた。それ以來、この地は「豫言者の町」(Madīnat-an-Nabī または Madīnat Rasūlu'llāhi) 略してマディーナ（メディナ）と呼ばれた。メッカの如く岩山に圍まれた不毛の地ではなく、ターイフ

Ṭā'if と並び稱せられるヒジャーズ地方一流の沃地である。しかし乍ら、結局アラビヤの曠野中の一オアシスというに過ぎぬものであつた。

第四代のカリフ (Khalīfa) アリーの時に、メディナを去り、イラークのアル・クーファ al-Kūfah に移つたが（西紀六五六）、これはアラビヤ人が既にそのころはシリヤ、イラーク、エジプト、イラン等を征服し、メディナの如き地では到底新領土の統治を十分に行うことが出來なかつた事が主原因であつた。クーファは第二代のカリフ、ウマル 'Umar のとき、サード・イブン・アビー・ワッカース Sa'd ibn-abī-Waqqāṣ が昔のバビロンの都址に遠からぬエウフラテス河右岸に創建した（西紀六三八）もので、その南方のバスラ al-Baṣrah と共にイラーク地方征服の軍事基地に用いるためであつた。背後には沙漠を、前面に兩河流域の沃野を控え、確にイラーク平原を控制する要地であつたが、とくにこのような所に據點をおいたのはサラセン帝國初期のアラビヤ人が、その大多數の故鄕だつた氣澄み、よく乾燥した沙漠の生活を容易には棄て得なかつたことをも示している。

クーファの禮拜堂でアリーがハーリジュ教派の刺客の手に斃れると（西紀六六一）、政權はメッカのクライシュ族の一派ウマイヤ家のムアーウィヤ Mu'āwiyah ibn abī-Sufyān の掌握する所となつた。彼は早くもカリフ、ウマルの時代からシリヤの總督となつてその地の民心を得ていた手腕のある政治家であつた。その政權も一部のアラビヤ人及び大多數のシリヤ人の支持によつて確立したものであつたから、この人及びその子孫の維持したウマイヤ朝の首都はシリヤの最も美しい町の一つとされるダマスクス（アラビヤ名 Dimashq）に置かれた。この地もまたシリヤ沙漠の西のはずれ、バラダー河 Baradā の岸邊に展開したグータ Ghūṭa のオアシスの上にある。グータの樹園の美しさはアラビヤ詩人等

がこの世の天國の如く讃美して倦まぬのであるが、これはひとつには、曠野に住み、または曠野を長い間旅して來たものが、久しぶりでこの綠を見るために、特に美しく印象深く感ずるものであろう。何れにせよ、ウマイヤ王朝が、ここに都したことは一つにはアラブ族傳統の沙漠の生活と密接な關係を繫ぎえつゝ、他の一面では農耕地帶に住む人民の支配にも便であつたためであろう。

ウマイヤ朝（六六一―七五〇）の支配者階級は、多分にアラビヤの氣風を維持していた。第五代のアブダル・マリク 'Abd-al-Malik（六八五―七〇五）の如く、從來各官衙の公用語であつたギリシヤ語を排し、アラビヤ語を以つてこれに替え、官吏にしても、アラビヤ語を自由に驅使出來ぬものは不適當として、その職から逐うと云う如き政策をとつた君主も現われている。

ウマイヤ朝は、教祖ムハンマドの叔父アッバースの子孫、アブール・アッバース Abū'l-'Abbās as-Saffāḥ を中心とするアッバース家のために滅ぼされ（西紀七五〇）たが、この變革の際、首都はメソポタミヤの沃野に近く選定されることになつた。これはアッバース朝が、一部のアラビヤ人、及びイラン人の協力によつて擡頭した事が有力な原因であつた。當時のサラセン帝國の版圖は東はアム河以北のトランスオクシアナ、インドの西北部、西は北アフリカ（イフリキーヤとマグリブ）、イベリヤ半島にまで及んでいたが、首都を置くべき中心地はまずシリヤかイラークの外にはない。シリヤはウマイヤ朝によつて榮え、その民心は決して同王朝を離叛し去つたわけでなかつた。そう云う場合、イラン人の協力を得て立つを得たアッバース朝が都を選定すべき地はイラークの外にはあり得ぬことは一見して明瞭である。同王朝の初期にはアル・クーファ及びその北方のアル・アンバール等を低回している。これは沃野の眞中に進出し得ず、沙漠の

生活に戀々たる如く見えるのであるが、クーファの如きは昔から情實、政爭の巢窟として有名であり、アンバールの如きも大帝國の首都としてはやゝ偏在の地であつた。

ここに於いてアブール・アッバースが天然痘で斃れた（西紀七五四）後を承けたその弟マンスール Abū Ja'far al-Manṣūr（兩唐書大食傳の阿蒲恭拂）は新帝國の要求する諸々の條件に適う如き新都を建設しようと企畫し、自ら入念な實地調査を行つた後、遂に大沃野の心臟部にあたりティグリス河中流にのぞむバグダードの地を選定するに至つたが、これこそまことにイスラム史上の一大轉換といい得るであろう。

そこはエウフラテス河の水がサラート運河 Ṣarāt によつて導かれて、ティグリスに流れこむ地點のすぐ北方にあたり、Baghdād と云うペルシャ人の村落がある所であつた。カリフ、マンスールがこここそ新都をおくに絶好の地と判斷し、その基礎を定めたのはヒジュラ後一四五年（西紀七六二）であつたが、そこには既によほどの古代から都市が發達したものと見られている。

一八四八年、英國のローリンソン Sir Henry Rawlinson は乾燥期のため、ティグリスが異常に減水した際、その西岸のバグダード市域の一部に新バビロニヤ時代の煉瓦積み工事が殘つていることを發見したが、その煉瓦には一つ一つにネブカドネッザル Nebuchadnezzar (Nabû-kudur-uṣur Circa 1146—1123 B. C.) 王の名や稱號が印してあつた。またその後、アッシリヤのサルダナパルス Sardanapalus (Assurbanipal 668—626 B. C.) 王時代の文獻に Baghdad らしい地名が現われていることが發見されたという。[1]

その意味についても、アラビヤ地理學者によつて種々の解釋が下されているが、これと云つてとるべきものはなく、

結局、古代ペルシャ語で「神」を意味するBagh と「建設されたもの」「建設」などを意味するDādh が結びついたもので「神の建設したる」町の義であろうとされている。(二) 中國の天子のことを、ペルシャ人が Baghpūr（後にアラビヤ語化して Baghfūr）と意譯したのも、Bagh が「神」ひいて「天」を意味したからであろう。

アル・マンスールが特にこの地を選んだのは、交通の要樞に當つていること、健康地であること、强大な軍隊を常駐せしめるに適していること等の諸條件を滿していたからであつた。從來、沙漠地帶から遠く離れ去ることが出來ず、農耕地との接觸部に都を選定して來たアラビヤ人が、バグダードの如き農耕の沃野の中心部に新都を經營する方針に移つたことからも時勢の變化はまざまざと看取される。

新都バグダードの設計は如何なるものであつたかと云うに、當時の壯麗な大工事も現在では全く氓び去つて、殆ど何等の遺跡をも地表に現わして居らず、地下の遺物の發掘調査も十分には行われていないから、昔の俤を偲ぶよすがとても無いのである。ただ、その間に生れ出た精神文化の遺產は、宮殿や城壁などの如くには泡沫に似て消え去らず、今に傳わるものも少くない。その中の地理、歷史、文學方面の文獻の今に殘るものには、往時のバグダードの景觀を斷片的乍ら保存しているものがある。故にこれらを綜合し批判すれば、創建當時の城市をある程度まで復原する事も不可能でない。それに、現地の考古學的調査の結果を照合して檢討すれば、ますます明瞭さを加えるであらう。

文獻よりする往時のバグダードの復原を行つて相當の成功を納めたと思われる者は、英國の東洋學者 G. Le Strange で、その著「アッバース朝カリフ政權時代のバグダード」(Baghdad during the Abbasid Caliphate from contemporary Arabic and Persian sources, Oxford 1900) にその結果が示してある。もとより、この書物公刊以後、東洋

學は格段の進歩を遂げ、特に考古學的研究に於いて見るべき結果が現れているが、リ・ストレンジ氏の復原を根本的に覆すが如き說は現われていない。

それによると、主城はエウフラテス河とティグリス河とが最も接近した所、後者の西岸に近く、兩大河を結ぶサラート運河 Nahr Ṣarāt の北岸に當る所に建設された。正確な圓形で、周廻約四哩であつたから、圓の直徑は約三千二百ヤード（二十八町餘）で、圓周を四等分し、四個所に城門を開いた。これはイスラム教徒としては初めてのもので、ペルシャの築城法をとり入れたものであろうとされている。(三) 最初、技師達は、廣漠たる沃野の上に、綿に石油をしみ込ませたものを設計圖に從つて置き、それに火をかけて燒くことにより灰を殘し、灰の線に從つて、或は城壁を築き、或は宮殿を建て、或は濠を掘つたのである。四人の工事監督主任の一人が、イスラム法學四大派の一つの創始者アブー・ハニーファ Abū Ḥanīfa an-Nu'mān b. Thābit (ca 699—ca 767) であつたと云われている。(四)

城壁は三重で、眞中が主城。その基部の厚さ一〇五呎、頂部の厚さは三七・五呎、高さは九〇呎であつた。外城は基部の厚さ七五呎、頂部三〇呎、高さ六〇呎であつた。また外城の外側には濠を繞らし、主城の內側にはさらに若干の距離をおいて內城が取卷いていた。これらの城壁の建築材料はすべて日乾煉瓦を用いたので、これが今日何等の遺跡をも留めずに湮滅した主原因となつている。

カリフの宮殿は、圓の中心點に當る所に、禮拜堂と並んで作られ、その敷地は二百ヤード四方、本殿は綠色の圓蓋の高さ約百二十呎なるを頂き、「綠の圓蓋」Al-Qubbatu'l-khaḍrā または「金門」宮 Bāb adh-dhahab と呼ばれた。カズウィニーの地理書によれば、この圓蓋の頂上には騎士の像があり、その持つた槍は叛亂の起つた地の方向を指す仕掛に

なつていたとあるが、(五)それは傳說にすぎぬとするも、騎士の像のあつたことは事實かも知れない。王宮と禮拜堂は正面を西南方、メッカのカーバ神殿に向けて居り、その方面に開いている城門がクーファ門 Bāb Kūfah であつた。クーファ經由、聖地メッカに向う本街道はここを基點としていた。東南面の城門はバスラ門 Bāb Baṣrah で、ここを出てティグリス河に沿つて南下すれば、ペルシャ灣頭のバスラ港に至るのである。バスラはいうまでもなく、サラセン人海運の大中心地で、東アフリカ、インド、東南アジヤ、シナ等に往復する海舶がもたらす豐富な物資の集散地であつた。東北面の域門をフラーサーン門 Bāb Khurāsān と云い、これを出て、ティグリス河を舟橋によつて渡れば、ハマザーン、ライ、メルヴ等の名邑を經て、アム河（ジャイフーン）の渡頭に至り、それより、ブハーラー、サマルカンド等を中心とする豐穰なマーワラーンナハル Mā-warā'n-Nahr（トランスオクシアナ）に至るべく、また別にアフガニスタン、シンド等に赴く途もある。アッバース朝の版圖中でも特に重きを置かれたイラン以東の地域は、このフラーサーン門を基點として展開するので國防上からも重要であり、物資の集散もはげしかつた。從つて、王城の對岸、卽ちティグリスの東岸地區に忽ちに殷賑な都會が形成されて行つた。西北面にはシリヤ門 Bāb ash-Shām があつた。これを出てアンバール街道を經て、シリヤの首邑ダマスクスに至り、アレッポを通じてアル・ルーム卽ちビザンティン帝國治下のアナトリヤに入る。ビザンティン帝國はウマイヤ朝以來サラセン帝國の最も手剛い對立國であり、兩者の間にはアナトリヤ方面を主な舞臺として、執拗な爭覇戰が繰返されていた。

圓城內には原則として一般市民の住宅を置くことは許されず、特に選ばれたものだけが、主城と內城との間の地域に若干居住を許されたのみであつた。故に城壁內には諸官衙が整然と立竝んでいるのみであつた。

三　東城と西城

當時のイラーク平原は今日の如く荒廢したものではなく、運河が網の目の如くはしり、十分に灌漑されていた故に人煙も濃やかで、バグダードからバスラまで人家の軒傳いに行けるといわれた程であつた。兩河流域の平野に少くも二千萬に達する民衆が生活していたらうと云われている。(六) そこへ前述のような壯麗な都城が建設され、政治經濟の中心が確立したため、この圓形の城をめぐり、とりわけて四つの門から派出する大街道に沿い繁華な市街地が非常な速度で擴がつて行つた。

最も著しい發展を遂げたのはティグリス東岸の地域で、フラーサーン門を出て舟橋を渡つた對岸一帶であつた。この邊は建都當時から軍隊の駐屯地にあてられた所であるが、アル・マンスールの子アル・マハディーの治世の間(七七五―七八五)には河岸ぞいのアル・ルサーファ區を中心に發展し、西岸の都市に匹敵するほどの殷賑さを示し初めた。

西岸の都市、卽ち西城の方はアラビヤ名を Az-Zaurā と云つた。「曲つた、歪んだ」と云う意味であるが、その理由はティグリス河床の彎曲部に沿つていたからであるとも、圓城の中心の禮拜堂のキブラが、メッカのカーバに對する正確な方向から少し歪んでいたからであるとも云われていて定說はない。東城の方は Ar-Rawḥā と呼ばれ、アラビヤ語で「擴がつた地、水の淺い地」を意味し、やはりティグリス河の狀態から來たものであるという。しかしこう云う語源的解釋は疑わしく、古くからあつたイラン系の地名ではなかつたかとリ・ストレンジは疑つている。(七)

カリフ、ハールーヌル・ラシードの治世(七八六―八〇九)に入ると、建都後三十年ほどで、早くもルサーファ Ruṣā

fah、シャムマースィーヤ Shammāsiyah、ムハルリム Mukharrim 等の各區を含む東城は、圓城を中心に擴がつた西部バグダードとほぼ等しい大きさとなり、東西兩部を合算すると市民の數は百萬を越え、唐の長安、ビザンティン帝國のコンスタンティノープルと鼎立し、世界最大都市の一となつた。また文化上の見地からしても、長安やコンスタンティノープルが、それぞれ東亜やギリシャの文化を代表していたのに對し、その光輝においてこれに讓ることのないサラセン文化の大中心となつていたのであつた。

東西兩市街の間を流れるティグリス河には舟橋を架してあつた。舟艇を横に並べて連繫し、その上に板を敷いたものであつた。圓城のフラーサーン門を出た所から、對岸のルサーファに至るものが主橋であつたが、後にはその上流に一つ、下流に一つ、都合三つの舟橋が並ぶに至つた。

三重の城壁と濠に圍まれた圓城内の王宮はかなり壯麗なものだつたらしいが、居住の地としては不自由、かつ不健康地ではなかつたかと思われる。それで、カリフ・マンスールはバグダードに移つてから數年後にフラーサーン門外、舟橋の西詰にフルド宮（al-Qaṣru'l-khuld……永劫宮）を建て、そちらにも住んだ。高燥な地で蚊が少なく、またバグダードの各區に行くに都合がよかつたからであるという。マンスールも、次のマハディーもこのフルド宮で暮す時の方が多かつたが、特に第五代のハールーヌル・ラシードは主としてここで政治をとり、ティグリス河畔に設けられたそこの庭園を樂しんだといわれている。(八)

アッバース朝の初期に強大な權勢と莫大な富を握つていたのは中央アジヤのバルフ Balkh 出身のバルマク Barmak 家であつた。その家はもとバルフ城の西南郊外にあつた Nova Saṅghârâma（または Nova Vihâra）卽ち「新寺」

の管長を勤めていたイラン系の名門であつたらしい。玄奘法師によれば（大唐西域記卷一）

縛喝國……城外西南、有二納縛唐言新僧伽藍。此國先王之所レ建也。大雪山北、作論諸師、唯此伽藍美業不レ替。其佛像則瑩(營)以二名珍。堂宇乃飾レ之奇寶。故諸國君長、利レ之以二攻劫。……などとあり、また大慈恩寺三藏法師傳（卷二）によれば玄奘はこの寺でインドの磔迦(Ṭakka)國（パンジャーブ地方）の小乘派の三藏般若羯羅（慧性 Pradjñâkara）と邂逅し、「相見て甚だ歡」んだとある。そしてその人に就いて一ケ月餘り毗婆沙論を讀んだ。また小乘三藏の達摩畢利（法愛 Dharmapryia）達摩羯羅（法性 Dharmâkara）等はその寺の中心人物であつたが、玄奘の神彩明秀なのを見て極めて敬仰を加えたとある。

玄奘がこの寺に滯在したのは唐の太宗の貞觀二年（西六二八）乃至四年のことと思われる。(九) イスラムの旗の下にアラブ人がこの地に侵入したのは第三代のカリフ、ウスマーン（六四四—六五六）のときでアル・アクラア・ビン・ハービス al-Aqra' b. Hābis を主將とする軍であつたとの事であるが、(十) その後土著民（イラン族特にエフタル族などが多かつたようである）の叛亂がしばしば起つた。ウマイヤ朝（六六一—七五〇）に入り、フラーサーンの總督イブン・アーミル Ibn 'Āmir の部將カイス・ブヌル・ハイサム Qais b. al-Haytham はバードギース、ヘラート、バルフ等の叛亂に對處するため、バルフを占領し Nau Bahār の殿堂を破壞したというが、それは西紀六六一年から六六六年の間の事らしい。(十一) 故に玄奘がここに滯在してから三十餘年後にはアラブ人のために破壞されたのである。ただし Yāqūt の地理辭典 (Mu'jamu'l-buldān) によれば、Nau Bahār を破壞したのはアハナフ・ビン・カイス Aḥnaf b. Qais であるとしている。(十二) アハナフが四千人のアラブ兵と一千人のペルシャ兵を率いてトゥハーリスターン方面で戰つたのはカリフ、ウスマ

ーンの時で西紀六五二年ころとされているから、[十三]前説よりも更に少し古いことになる。このあたりのイスラム教徒初期の征服史には傳説的部分が多く、はつきりした史實はわからない。いずれにせよ玄奘が滯在してから、さして久しからずしてアラブ軍の攻略を受けたもので、玄奘の記錄は破壞前に於ける最も詳細なものであろうと思われる。大唐西域記には右に引用したことの外に、突厥葉護可汗の子肆葉護がこの寺を襲い、珍寶を掠奪しようとして俄に歿したことや、寺の寶物であつた佛澡罐、佛牙、佛掃帚のことなどをしるしてある。

ノヴァ・ヴィハーラ、卽ちアラブ人のナウ・バハールについてはアラビヤ史書、地理書に相當に豐富な記錄があるが、最も興味の深いのは Ibn Faqīh こと Abū Bakr Aḥmad bin Muḥammad al-Hamdhānī が西紀十世紀の初め（九〇二年のカリフ、ムウタディドの歿後間もなく）書いたといわれる Mukhtassar Kitābu'l-Buldān 中の記載であろう。[十四]また同じく十世紀(中葉)のマスーディー Mas'ūdī もこれについてしるし、サーサーン朝時代には拜火教の大神殿であつたとしている。[十五]しかし、イブン・ファキーフもしるしている如く偶像を祀り、聖旗を立てていた等の事實からローリンソン (Sir H. Rawlinson) は Nau Bahār は 'the New Vihārah' で佛教の Monastery でなかつたかと云う意見を出した。[十六]その正しいことは大唐西域記によつても明瞭である。故にバルマク家の祖は佛教徒であつたのであろう。後にイスラムに改宗しハーリド Khālid に至つて、アッバース家に協力し、カリフ、アブール、アッバース・アッ・サッファーハの宰相 Wazīr となつた。第二代のカリフ、マンスールのときも引きつづいてその位置を保持した。ハーリドの子ヤヒヤー Yaḥyā はカリフ、アル・マハディー al-Mahdī（七七五—八五）に信任され、同じくワジールとなり、次代のアル・ハーディー（七八五—六）、更にその次のハールーヌル・ラシードの時に及んだ。ヤヒヤーの子ファヅル al-Faḍl

及びジャアファル Ja'far もハールーンの信任を得、特に後者はその寵臣として常に側近に侍したのである。西紀八〇三年にハールーヌル・ラシードは突然にジャァファルを殺し、バルマク家は沒落するに至つたが、その繁榮時代に（七八六―八〇三）同家一門は國政の要路に立ち、巨富を擁し、よく學者文人を保護した。アッバース朝初期の文化政策もこの一家の人々によつて推進された點が多かつたのである。バルマク一門の邸宅はティグリスの東岸にあり、特にジャアファルが造營した邸宅は宏壯華麗なもので、バルマク家の全盛期を代表するもの、al-Ja'fari と呼ばれた。(十七) かく富强はカリフを凌ぐと云われた同一門の本據が東城に置かれ、その保護した學問美術の中心となつた位で、東部の重要性は、マンスールの建都後三十年ほどで、前述の如く早くも王城のある西部にせまり、或はこれを凌駕する傾向さえ示し、國政の中心もまた漸次西部から東部に移つて行つたのであつた。

四　政情の變遷

初めアル・マンスールが新都を經營したとき、その公稱をマディーナ・アッ・サラーム (Madīnat-as-Salām) 卽ち「平安の都市」と定めた。爾來、これが正式の名稱となり、同王朝の貨幣などにもこの名が用いられている。しかし一般の呼稱には古來の「バグダード」という名の方が用いられた。新名稱の奥には幾久しく平安なれとの心願が籠められたものであろうが、事實は逆の方向をとり、この「平安の都」も幾度か兵火を蒙つたのみでなく、アル・マンスール以下十五代目のアル・ムウタミッド al-Mu'tamid（八七〇―八九）に至るまで百四十年間、歷代のカリフのただひとりとして、この都の王宮で瞑目したものはなく、すべて或は旅途に、或は遠征の陣營中で歿したのである。一二五八年に蒙古

のフラグ汗の攻伐を蒙つて滅びるまで四九七年間に、大規模の兵火にかかること前後四回に及んでいる。第五回目に蒙古軍により徹底的に破壞され、イスラム文化の蓄積は償い得ぬ損失を受けるに至つた。

第一回兵火はハールーヌル・ラシードの死後、その子アミーンとマームーンの對立抗爭から惹き起されている。父のあとをついでカリフとなつたアミーンを快しとせぬ異母弟マームーンは、イランの物的人的資源を擁することによつてこれと對抗し、西紀八一一年、部將ハルサマをしてバグダードの東部を、ターヒルをして西部を包圍せしめた。當時東部にはまだ城壁が無かつたので、これが先ず陷落したが、西部の都城に據つたアミーンはよく防ぎ、攻防實に足掛け三年（滿一年數ケ月）に及び、遂にアミーンの最期を以つて結末を告げた。アル・マンスールの築いた圓城の如きも僅に存續五十一年で、回復絕望の狀態にまで破壞されたという。この戰にアミーンが籠つたのは圓城と、フラーサーン門外のフルド宮とであり、後者の庭前の埠頭から舟でティグリスの東岸に脫出しようとしターヒルの部下に發見されて殺されたのであつた。（十八）

兄に代つてカリフの位に就いたマームーンは、荒廢した西部を棄てて、ティグリスの東岸に宮殿を移し、もとのバルマク家のアッ・ジャアファリーを修理してこれに居ることになつた。ハサニー Hasanī 宮と呼ばれたのがそれである。アル・マンスールの建都から、マームーンの歿時まで（西紀七六二―八三三）がアッバース朝の全盛期で、從つてバグダードもこれと運命を共にし、最も華かな時代であつた。

マームーンの後をうけた al-Muʿtaṣim はトルコ系傭兵の騷擾を避けてバグダードを去り、ティグリスを溯つた所にあたるサーマルラー Sāmarrā (Surra-man-rāa) に遷都した。これよりカリフ Muʿtamid（八七〇―八九二）がまたバグダ

ードに還るまで（西紀八九二）、五十七年間六人のカリフの治世は、バグダードは首都としての名目を失っていたのである。もつとも、この間に新都サーマルラーまで騒擾を持ち込んだトルコ系傭兵の專横を嫌つたカリフ al-Musta'in（八六二―八六六）は西紀八六五年にバグダードに歸つたが、これを怒つた傭兵達は南下してカリフを攻め、バグダードは再び兵亂の巷となつた。著名な歴史家アッ・タバリー（Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr aṭ-Ṭabarī, 838―923）は當時まだ三十歳にたらぬ若さでこの地に居り、具に籠城の實況を目擊したものと見られている。故にその世界史（列聖列王紀 Kitāb akhbāru'r-rusul wa'l-mulūk）中には、この亂に關する詳細な記錄があつて、當時のバグダードの事情を研究する好資料となつている。この際、甚大な被害を蒙つたのは、ティグリス河東岸の市街で、その中樞部ルサーファ、シャムマースィーヤ、ムハルリム各區は燒野原と化し、遂に昔日の姿まで復舊することは不可能となり、僅に一部分が再建されたのみであつた。故にムウタミッドの還都後は、この荒廢した部分の南方、ティグリス河のやゝ下流ぞいに新市街が興り、これが、全バグダードの中心となつた。この地區は往時の東部バグダードの南郊で、田野だつた所であるが、創建當時の圓城を初め、西部市街の大部分が先ず荒廢し、次に東部市街の目貫きの部分も戰火を蒙つたので、王宮、諸官衙、商舗等の多くは、この新開地に集つた。こうして出來た都市はティグリス河にのぞむ面をのぞき、他の三面に城壁が建造された。十三世紀中ごろに蒙古軍が主力を以つて攻擊したのもこの部分であるし、現在のイラーク王國の首府としての中心部も大體はこの部分にあるのである。

アル・マンスールが築いた圓城や、その中心の金門宮、及びハールーヌル・ラシードの豪奢な生活が繰りひろげられたフラーサーン門外のフルド宮など、輪奐の美を極めた大建築の多くは荒草裡に頽圮し去つたのである。しかし、ティ

グリス西岸の都會があげて荒廢したのではなく、カルフ Kalkh 區とかクライヤ Qurayyah區とか、そのかみの圓城の外に發達した諸市域は、よし昔の俤はなくとも、また昔時の如く一連りの大都會としての姿は失つたにせよ、あちらに一つ、こちらに一つと平野の間に殘存し、別々に城壁を繞らしたりしていたのであつた。これらのやゝ寂寞たる小市街のいくつかを圖上につらねて、回顧の心をこめて想像をめぐらせば、初めてアッバース朝初期の日輪の屋根より出て屋根に入る熱鬧さを偲び得たわけである。

五　文化の醞釀

西紀八九二年にカリフ、アル・ムウタミッドがサーマルラーからバグダードに還都してから約五十年間は、前節に述べた如くティグリス河東岸の新市街地の建設が盛に行われた時代であつた。先ず河岸の形勝の地域には大規模の宮殿や園囿が營まれた。ハサニー Hasanī 宮、タージュ Tāj 宮、フィルドゥース Firdūs 宮などがその例で、カリフの禮拜堂も新に建設され、その背後にはムクタディーヤ Muqtadīyah、マムーニーヤ Mamūnīyah 等の諸區を初め八百八町が錯雜した街衢を連ねたのである。

ハティーブ (Abū Bakr Aḥmad b. ʿAlī b. Thābit al-Khaṭīb al-Baghdādī, 1002—1071) の「バグダード史」Ta'rīkh Baghdād によれば西紀八八四年ころのバグダードの廣さは東部が二六、二五〇ジャリーブ（十二平方哩四分の三）、西部が一七、五〇〇ジャリーブ（八平方哩四分の一）であつたと云う。現在のバグダード市の廣さに比較すれば少くも十數倍であつたのである。(十九)

かく新しく發達したバグダードの都城も、西紀一一三六年に至り、第三十代のカリフ、Manṣūr ar-Rashīd の治世に至り、約二カ月間にわたつてセルジューク・トルコのスルターン・マスード Mas'ūd の軍の包圍攻撃を受けた。その後二十餘年、次代のカリフ al-Muqtafī のとき（西紀一一五七）同じくセルジューク・トルコのスルターン・ムハンマドの軍により三カ月に亙る包圍を蒙つている。この前後二回の攻城の事情はアッ・タバリーと並ぶ大歴史家イブヌル・アシール (Abū'l-Ḥasan 'Alī b. abī'l-Karam...ibnu'l-Athīr ash-Shaibānī, 1160—1234) により、その「完史」Kitābu'l-kāmil fī't-ta'rīkh 中に細敍され、この文化都市が、武骨なトルコ族に攻め立てられる樣をよく傳えているのである。

これより蒙古軍によつて致命傷を與えられるまでの約百年間のアッバース朝は、殆ど政治的實力を喪失し、僅に惰力と、カリフと云う聖職をつゝむ傳說的の神祕さに護られて存續したと云えるのであるが、學藝の方から見れば、それほど萎微したものではなかつた。却つて數百年の蓄積を重ね、洗練され、爛熟の域に入つていたと見るべき點も多い。またこの時代のカリフ達は志を政治方面に延ばすことが出來ず、豪奢な王宮裡に一種の囚人に似た生活を送つていた反面では、しきりにその樓閣や園池の華美ならんことに腐心した。されば一一五五年に聖地巡禮の道すがら、この地に錫をとどめたペルシャの詩人ハーカーニー (Khāqānī, Afḍalu'd-Dīn Ibrāhīm b. 'Alī, 1106—1185) は、その壯麗さに驚歎し、カリフの宮殿、ことにその園囿はこの世ながらの樂園であると歌つた。(二〇) またこの期間のバグダードの事情を研究する材料としては一一六〇年に來訪したユダヤ人トゥデーラのベンジャミン (Benjamin of Tudela)、一一八五年に來たスペインのアラブ系旅行家イブン・ジュバイル (Abū'l-Hasan b. Jubair, 1145—1217) 等の旅行記がある。情趣豐かな文章でその旅行記 (Riḥla) を綴つたイブン・ジュバイルは、バグダードの西半は既に大部分荒廢に歸したが、僅に往時

のカルフ區のみが城壁を繞らして、やゝ繁華であると傳えている。即ちそのころは、都市としての繁榮は殆どティグリスの東岸に移り、西岸の方はさびれる一方であつた事を知り得るのである。

右のような變遷はあつたが、バグダードはイスラム文化の大中心たる地位を失わなかつた。所謂サラセン文化の盛時であつた八世紀後半から十三世紀前半ころにかけて學藝史上に名を留めた人々の傳記を檢すると、その生地は東は中央アジヤから、西はスペインにわたり、多種多樣であるが、共通した點は大低、一生に少くとも一回はメッカに巡禮すると共に、バグダードで若干の歲月を過していることである。またそのままここに永住してしまつたものもかなり多い。

アッバース朝建國のころ、即ち西紀七五一年（唐の玄宗の天寶十載）に中央アジヤのタラス河畔で將軍高仙芝の率いる唐朝の軍と、フラーサーンの總督アブー・ムスリム麾下の將ズィヤード・ビン・サーリフ Ziyād b. Sāliḥ の率いるアラブ軍との大戰が行われ、後者の大勝利に歸した。この際西方に拉致された中國の捕虜中、紙の製法に通じていた者達を用いてサマルカンドに麻の纖維を利用する紙漉工場を起したと云うが、同七九四年に至り、フラーサーンの總督だつたバルマク家のアル・ファヅル・ビン・ヤヒヤーはサマルカンドから製紙職人をバグダードに送らしめ、この地最初の紙漉場を經營した。アル・ファヅルの弟ジャアファルは公用文書に、從來の羊皮紙を廢し、麻紙を以つてこれに代えたと傳えられている。(二)

紙の普及はますます學術の發達を助けたものと思われる。西紀九世紀末のヤークービー（al-Ya'qūbī, Aḥmad b. Ya'qūb b.Ja'far, 897 又は 905 歿）の諸國誌（Kitabu'l-buldān）によれば、バグダード市内には百餘軒の書肆があり、一街に集つて軒を並べ、それらの主人中には學識の深いものもあり、また彼等の店頭は常に學者文人等の集會所となつて

いて、盛に高談清話を闘わしていたとある。(二二) 地理學の權威として不朽の名を殘したヤークート (Yāqūt b. ʻAbdallāh ar-Rūmī, 1179—1229) もバグダードで書物をひさいで生計を立てた時代があり、(二三) それよりも早く西紀九八八年に「書目」(Kitābu'l-Fihrist)を著し、アッバース朝期前半に於けるイスラム學術界の有樣を如實に示して見せたアン・ナディーム (Abū'l-Faraj Muḥammad b. Isḥāq b. abī Yaʻqūb an-Nadīm al-Warrāq al-Baghdādī, 995 歿) も本業は書店主で、寫本を作つたり、これらを賣買したりしていた人であつた。彼の典籍に關する該博な知識は、その營業を通じて得たものが多かつたであろう。アル・フィヒリストに收錄された多數の文獻中、今日も殘つているものはそのうちの僅の部分にすぎない。この事實は、バグダードなどを大中心にして咲き匂つた人間叡智の花辨が多くは空しく泥土中に滅んでしまつたことを意味している。またこの書には催眠術、曲藝、劍呑み、硝子食いなどに關する書名も多くあげてあつて、當時のバグダード市內の盛り場の光景を暗示しているのである。(二四)

市內に多數の禮拜堂（マスジドやジャーミウ）があつたことは云うまでもない。それらには豐富な文獻が藏せられ、一種の圖書館としての役目を果していたが、別に諸科の學校も各所に開かれていた。イブン・ジュバイルは西紀一一八五年ころの狀態を述べてバグダード市內には神學、科學等につき高級の研究をしている學園が三十カ所位あると云つている。かの地の學園で特に有名だつたのは、九世紀中葉にカリフ、アル・マームーンの創立した「智慧の家」Baytu'l-Hikma、十一世紀後半にニザームル・ムルク Nizāmu'l-Mulk（ペルシャ人で、セルジューク朝の賢相）の建てた「ニザーム學院」Nizāmīyah 等であるが、十三世紀に入つてからカリフ、アル・ムスタンスィル al- Mustanṣir (1226—1242) が創立した「ムスタンスィル學院」Mustanṣirīyah も有名で、その入口には大きな水時計がとりつけてあつた。

試みにその組織を見るに、法學については、スンニー派の四大學派を代表する四つの學校がその中にあり、それぞれ教授一員、研究生七十五人で、後者は授業料を免除されていた。また附屬圖書館（Dāru'l-Kutub）食堂、浴場（Hammām）病院（Bīmāristān）等が備つていたという。[二五] この學院は西紀一二三四年に完成し、二十五年後に蒙古軍の攻伐にあつた。しかし幸いに破壞を免れ　一三二七年にイブン・バットゥータ Ibn Baṭṭūṭah が訪れたときも、更にそれより十二年後にペルシャの地理學者ハムダルラー Hamd-Allāh が見たときも、そのころのバグダードで最も美しい建物であり、依然として學園としての活動を續けていたのである。[二六]

蒙古軍來襲の少し前、即ち一二四〇年代にバグダードに滯在したスペインのイスラム教徒イブン・サイード（Abū'l-Hasan 'Alī b. Sa'īd al-Maghribī, c. 1274—c. 1208）は、そこで三十六カ所の圖書館を利用したといつている。[二七]

當時のバグダードには醫療の施設もよく整つていて、大規模の病院が設けてあつた。アッバース朝の醫學にはキリスト教徒やユダヤ教徒の貢献が著しかつた。ギリシャ系の醫學がシリヤを通じてペルシャに傳わり、サーサーン朝時代にフージスターン州の首邑ジュンダイ・サーブール Junday Sābūr（またはジュンディー・シャープール Jundī Shāpūr。その遺跡は今日ではシャーハーバードと呼ばれている）[二八] がその中心となつた。アッバース朝期に入つても、この地は依然醫學の中心で、多くの名醫を出したが、特にブフト・イシュー（ブフティシュー Bukht-Yishū'）一門の如きはアッバース王室の侍醫として重用された。音樂による治療も行われていたらしい。西紀九三一年には、カリフ、アル・ムクタディルは初めて開業醫の檢定試驗を行い、これに合格した者八六〇餘名に免許狀（ijāzah）を與えたという。公立病院はカリフ、ハールーヌル・ラシードが創立した Bīmāristān を最初のものとし、漸次に增加して三十四カ所に及んだと

稱せられている。(二九) この名はペルシャ語で「病氣」を意味する bīmār より出たもので、その設備、技術ともにペルシャ醫術を採用したものであるが、前述した如く、本來はギリシャ系統のものであつた。しかし、アル・ラシードの時代にはインドの醫學者らも招聘されてバグダードに來て居つたと云われ、そのうちの一人マンカ Manka の名が傳つている。(三一) また吸入による痲醉の術の如きは支那醫學の影響であろうとされている。(三二)

キリスト教徒が醫學界で活躍したのはカリフ、アル・マンスールがネストル派のキリスト教を奉ずるペルシャ人を侍醫としてから、バグダードの醫學界にペルシャ系キリスト教徒の閥が出來たせいもあつたらしい。また一般にキリスト教徒中に醫をよくするものが多かつたためもあろう。千夜一夜物語などを見ても店頭に種々のシャーベットを入れた壺を並べて、患者を待つ町醫などの多くはキリスト教徒たるペルシャ人であつた如くしるされている。醫學とともに藥學も發達し、バグダードはその中心となり、西洋藥物學にも影響をあたえた。前記のシャーベットの如きも嗜好品という外、藥用にも用いられたのである。

シナ、チベット等の山中から產する麝香、南海の抹香鯨の出す龍涎香（アラビヤ語アンバル）などの動物性香料を初め、乳香、沒藥、沈香、白檀、降眞香、肉荳蔻、鬱金香等の植物性香料、薔薇、董、水仙その他の香水類もバグダードの市場で盛に取引きされていた。

公共浴場（ハンマーム）は宗教儀禮や衞生上の必要から發達し、更に進んで、バグダード市民の一種の享樂の對照となつた。ヤークービーの地理書によれば、建都後久しからずして、市内には一萬に及ぶ公共浴場が出現したとあり、アル・ハスィーブによればバグダード市内で、カリフ、アル・ムクタディル（九〇八―九三二）の時代にはハンマームの數

は二萬七千個所に達し、更にある時代には六萬を數えたといつている程である。(三二) 蒙古軍來襲時の破壞によつて、全く昔日の盛觀を失い、大部分は廢墟と化し、復興もはかばかしくはなかつたころ、この地に來た（西紀一三二七年）イブン・バットゥータさえも、溫水と冷水が豐に溢れ流れる完備した浴場が多數市内にあつた事を傳えている。(三三)

フナイン・ビン・イスハーク (Abū Zaid Hunain b. Iṣhāq, 809—73) はカリフ、アル・マームーンに仕え、その圖書館を管理し、アリストテレス、ガレン、ヒッポクラテス、ディオスコリデス等のギリシャ語文獻をシリヤ語に飜譯、さらにその一族門下の人々が、これをアラビヤ語に重譯し、サラセン文化の發達に貢獻した。彼はヒーラ al-Hīrah 出身のネストル派のキリスト教徒であつたが、その傳えた所によれば當時のバグダードでは學問は高く評價され、學者の社會的地位も高く、快適な生活を送ることが出來たという。卽ち近郊に乘馬運動をした後、ハンマーム（浴場）に赴き、下僕に冷水をそそがした後、寬衣をつけ、甘い飲物に喉をうるおし、そこばくのビスケットなどをとり、快よく一睡する。目覺めると、貴重な香料を薰じて身體をくゆらし、夕食を命ずる。食事はスープ、よく肥えた雞、パンなどで、古葡萄酒、シリヤの林檎、まるめろなどにも事かかなかつたとある。(三四)

右の如く高い文化と豐富な物資と、陰翳の濃かな生活とを持ち、繪の如く美しい宮殿樓閣を中心に、ティグリス河を帶の如くまとつて、慌しく、樂しげに、また時には苦しみつゝ、生きつづけていたバグダードを襲つたのが、殺伐な蒙古軍であつた。强い弓と健かな悍馬を驅使して、東は黃河から、西はティグリス、エウフラテス、更にヴォルガ、ダニューブ河畔にまで至る歐亞の文化地帶を縱橫に蹂み躙つた彼等の殘虐さは、こまかに東西の史乘に書き殘されている。西アジヤに於いてはイル汗國を、東亞では元朝を樹立したが、遂に被征服民族の心服を得ず、短日月の間に崩壞し去つ

たのである。バグダードもまたこの嵐に捲きこまれ、人も樓閣も民家も書物もほとんどみな炎のうちに滅び去つた。

しかも更に一三九三年には中亞の英雄ティムールの來襲を受け、市中各所に生首の塔が築かれ、一五三四年にはオスマン・トルコの征服を受けた。そしてエウフラテス、ティグリス兩河を利用した運河網は適當な管理を失つて荒廢したため、河水は下流に沼澤地を作り、疫病は流行し、人口は疎散し、これが益々農業の衰微を促した。こうして、古代からの沃野は慘澹たる零落の巷となり、イスラム文化の大中心であつたバグダードも僅にこの貧しいイラークの一都會として存在を保つだけとなつた。一九二〇年代から新興のイラーク王國の首府として、やゝ近代化しつゝあるが、到底アッバース朝の都としての盛には戻るべくもない。

かく蒙古軍來襲より今日に至るまでのバグダードは世界文化の中心たるの地位を失い、一地方都市と化したのである。しかしながら、かかる變化は單にバグダードなる一都市のみのものでなく、實にイスラム世界全體の命運の大變遷を示すものであつた。次に順次そのことを檢討して見たいと思う。

六　蒙古史料に現われたバグダードの特産品

バグダードほどの大都會ゆえ、その名が早くから極東地方にも知られていたことは、當然としなければならぬ。唐の德宗の貞元年間（西紀七八五―八〇四）に宰相賈耽が著した「皇華四達記」の一部と認められる「廣州通海夷道」（新唐書卷四三下）に南海航路の終點として出てくる「縛達城」は中國の資料として、此の都市を傳えた最古のものであろう。同書では印度の最南端たる沒來國（大唐西域記卷十の秣羅矩吒 Malakoṭṭa）からインダス河口に至り、海岸ぞいに西に進ん

でペルシャ灣に入る。そしてその北頭の大食國の弗利剌河（al-Furāt, Euphrates）をやゝ溯つた所にあつた烏剌國 Ubullah に至り、そこから「小舟、流れを泝ること二日」で、大食の重鎭末羅國 al-Baṣrah につく。茂門王（信徒の首長の義である amīru'l-mu'minīn の後半を音譯し、それに王をつけたもの）の都する所たる「縛達城」はこのアル・バスラから「西北陸行千里」としてある。（三五）賈耽が皇華四達記を德宗に上つたのは貞元十七年（西紀八〇一）であつたから、その時から數えても、なおバグダードの創建を隔ること僅に四十年程にすぎない。

次には宋人周去非の嶺外代答に「白達國」として現われている。この書は南宋の孝宗の淳熙五年（西紀一一七八）に成り、アッバース朝第三十三代目のカリフ、アル・ムスタディー al-Mustaḍī (1170—80) の治世第九年目にあたる。當時は同王朝の末期にあたり、衰微の甚しい時にあつたのであるが、それでもなおカリフの威權の盛な有樣と、バグダード市中の繁華さをのべて

「白達國あり。大食諸國の京師に係るなり。その國王は則ち佛麻霞勿（Muḥammad）の子孫なり。大食諸國兵を用いて相侵すも、敢てその境は犯さず。故を以て其國は富盛なり。王出ずるや皂蓋を張る。金柄にして其の頂に玉獅子あり。背には一大金月を負い、人目を燿すること星の如く、遠くより見るべきなり。城布衢陌、居民豪侈、寶物珍段多し（下畧）」としている。

同じく宋の趙汝适の諸蕃志にも白達國の事を述べてあるが、その內容の大體は前述の嶺外代答から取つている。ただ「國は極めて强大にして軍馬器甲甚だ盛なり。王は乃ち佛麻霞勿の直下の子孫にて、相襲傳位、今に至る二十九代、六七百年を經たり」と云う一節があることに注意される。諸蕃志は宋の理宗の寶慶元年（西紀一二二五）九月に成つた書物

であるが、(三六) それは第三十五代のカリフ、アッ・ザーヒル az-Zāhir の即位の年に當る。ヒジュラ暦では六二二年であるから「六七百年を經たり」とあるのとは大體合つているが、二十九代とは、どう云うものであろうか。ヒルト、ロックヒル二氏の諸蕃志の譯註書では二十九代を二十九世代と解し、一二四二年から—一二五八年に及ぶアッバース朝最後のカリフ、アル・ムスタァスイム al-Musta'ṣim の治世の間とし、これをもつて、諸蕃志そのものの編纂の時期であろうとしている。これは勿論、この書編纂の時日を明記した趙汝适その人の序文を見ることを得なかつたために、そう云う推定を行つたのである。(三七) アッバース朝第二十九代目のカリフはアル・ムスタルシッド al-Mustarshid (1118—1135) であるが、泉州に住み、提擧市舶の任にあつて、そのころの海外事情によく通じていた趙汝适が少くも六十年以上も前に在位したカリフを、彼と同時代人であるかの如く書いているのは解しかねる所である。或はこのことを彼に傳えた者が歴史の智識に暗い人でもあつたのであろうかとも思われる。

何れにせよ、趙汝适が諸蕃志中でバグダードの繁榮と、そこに君臨するカリフの威權の高いことを記しているころには、既にこの地は蒙古人の脅威の下にさらされていた。即ち成吉思汗が西征の軍を起したのは西紀一二一九年のことであり、その次の年にはフワーリズム王國を潰滅せしめている。しかし、その主力は更に西方には向わず、南下してインドに向い、やがて東方に歸り去つたので、バグダードも一先ずは侵略の厄から免れている。しかし、成吉思汗の後繼者の時代になると、蒙古民族の活動は益々廣範圍となつて、徐々にイラーク平原にも及ぼうとしていた。

蒙古族そのものの文化は甚だ低く、ウイグール族の文化の如きものに接觸しても、強くその影響を蒙つた位の程度であつた。しかし、そのために、漢族もトルコ族もイラン族もアラブ族も、その他諸々の民族がその起した嵐に捲きこま

れたため、蒙古族の活動に關する記錄は多種多樣である。バグダードに關しても、蒙古族と交渉を持つようになつてから、特色のある資料が生れている。これらを比較考究すれば、その文化の特色を明確にするものがあると私は思つているので、次にその二三の試みをして見たい。

先ず蒙古側の資料中、最も早くバグダードのことを記したのは元朝祕史（Mongholun niuča tobča'an）であると思われる。云うまでもなくこの書はふつう西紀一二四〇年の七月、外蒙古のケルレン河畔で書き終えたものとされてきたが、清の丁謙をはじめ植村清二、小林高四郎諸氏は一二二八年に成り、その後追加されたものとしている。その續集卷二のうちに西紀一二二九年に太宗オゴダイ（ウゲデイ）からペルシャ征伐の命を受けた綽兒馬罕豁兒赤（チョルマカン・ゴルチ）がイラーク地方に入つて、バグダードの兵を破つたことを述べて（三八）

「綽兒馬罕豁兒赤は巴黑塔惕の民を降らせき。その地好く物好しと云はれたりと知りて、斡歌歹合罕勅あるには『綽兒馬罕豁兒赤をすぐそこに探馬に坐えて黃なる金、黃ばめる金ある納忽惕、金襴、總金襴、眞珠、東珠、頸長く脚高き脫必察兀惕古嗒額劣兀惕、荅兀昔乞你都惕、馱くる合赤都惕老撒速惕を年ごとに送らしめておこせ居れ』と宣へり。」

とある（那珂通世氏成吉思汗實錄卷の十二）同じ箇所を小林高四郎博士は次の如く譯している。

「箭筒士チョルマハンはバグダト（バグダッド）の民を降服したが、その土地は好く物貨も好いと言はれてゐると知つて、エゲディ・ハガンが仰せられるには『箭筒士チョルマハンをばそこに探馬となして黃金、黃ばめる金ある、金襴、繡金、眞珠、東珠、頸長く脚の高いトビチャクといふ西馬、グリンゲレグトと呼ぶ駱駝、ダルシ・キチドットといふ駱駝、荷を積むカチドットという騾馬を年々朝貢させよ。』と」（三九）

右の文中に出てくるゴルチ（Korchi）チョルマハン（Chormakhan, Charmaghan、ラシード・ウッ・ディーンのCharmaghun）は一二三七年からイラーク・アラビーに侵入した蒙古軍の驍將である。成吉思汗の歿後、一二二九年の春に開かれたケルレン河畔のクリルタイでオゴダイがその後繼者に推戴されると共に、西方に二軍隊を派遣する議が決した。その一つはキプチャック族と南ロシヤへであり、他の一はフワーリズム・シャーの遺族の討伐のためであつた。後者の主將がチョルマハンで、一說に約十萬の軍勢を擁し、フラーサーンを經てライに至り、更にメソポタミヤの北部に入つてモスル mauṣil に向い、一二三三年にはガンジヤ Gandja（アッラーンの首府）を圍み、アザルバーイジャーン、アルメニヤ、イラーク・アジャミー、アッラーン等を占領し、ジョルジヤを討伐し、キルマーン、ファールス地方を屈服せしめた後、一二四一年の初めに職を解かれている。(四〇) 故にバグダードの民を降したと云つても、直接バグダード城に薄つたわけではなく、カリフの屬領の一部を占領したにすぎない。

白鳥博士の音譯蒙文元朝秘史（東洋文庫刊、續集卷二、頁二六〇）により、蒙古朝廷が要求した品々をもう一度列記する次の如くである。

黃	金	黃	金有的（每）	渾金（每）	繖金（每）	繡金（每）	珠子（每）	大珠（每）	頸項		
失剌	阿勒壇	失剌馬勒	阿勒塔壇	納忽惕	納赤都惕	荅兒荅思	速不惕	塔納思	古主兀		
Šira	altan,	Širamal	altatan,	naqud,	načidud,	dardas,	subud,	tanas,	küžügü		
長（每）	脚	高	西馬（每）	駝名（每）	駝名（每）	駝名（每）	駄々行	騾名（每）			
兀兒禿思	闊勒	溫都兒	脫必察兀惕	古零—額劣兀惕	答兀昔—乞赤都惕	阿赤阿納	合赤都惕				
urtus	köl	ündür	tobičaγud,	külin-eregüd,	daγusi-kičidud,	ačiγan-a	qačidud				

第一のシラ・アルタン、卽ち黃金については問題はない。

第二のシラマル、アルタタン・ナクドを那珂博士は「黃ばめる金ある納忽惕」と讀み「納忽惕は器物か。明本傍譯に渾金とあれどいかが」と考えられ、小林博士は「黃ばめる金ある」として altatan で切つている。何れにしても意味がはつきりしない。Bretschneider 氏は「納忽惕」をペルシャ語 nakh の蒙古語複數の形で、十四世紀初めのイタリヤの商人 F. B. Pegolotti の傳えた nacchi, nachetti であり、イブン・バットゥータが金銀絲を織り込んだ布として、その旅行記中數ケ所で記載しているものとしている。(四一) さらにこのものについて Hirth, Yule, Laufer, Pelliot、藤枝晃諸氏の考が發表されている。

ヒルト氏は趙汝适の諸蕃志「白達國」の條にあるバグダードの特產物「白越諸布」の「諸」(廣東音 nok) をマルコ・ポーロがバグダードの名產の一としてあげた織物 Nac と同じではないかと考えた。(四二)

ローファー氏はこの考に贊成し、「諸」の古音は nak で、ペルシャ語の naχ (nakh) によく適合し、Steingass の說明した如く「長いけばのある兩面とも美しい絨毯。けばの短い小さな絨毯」でもあるが、また「錦」をも意味するとした。更にこの名詞は早く隋書(卷八三、西域傳波斯の條に越諸布とある)などに現われる所から、nak または naχ なる語は中世ペルシャ語中にあつたに違いないとしている。(四三) ペリオ、藤枝諸氏のは主に元代の諸資料に現われた nakh と nasij の研究であるが、(四四) 特に nasij について詳しく、nakh の方に就いては格別新しい資料を示していない。

私は那珂博士の如くŠiramal altatan naqud と續けるのは誤りで、小林博士や白鳥博士の如くアルタタンで切つて讀むべきものと考える。第一の「シラ・アルタン」は普通の金塊を意味し、第二の「シラマル・アルタタン」は黃金をつかつて細工した品々を指すのではないと思う。ナクドはこれと切離して第三の品として擧げたものと解したいのである。そして第四のナチドッドとあわせて考をのべようと思う。

第四は načidud で金襴と譯されている。これについても前掲の諸學者の研究が發表されていて、茲に新に加うべきことは僅少しかない。藤枝氏の譯出された如く、マルコ・ポーロの書第二十五章バウダス（またはバウダック Baudac）のところに

「バウダスの町では、金と絹で作つたいろいろな織物がつくられる。魚や、獸や、鳥やその他の模樣で豪華に細工した、さまざまの種類のナスシト Nassit とか、ナク Nac とか、クレモシ Cremosi とか、その他のいろんな織物、緞子、及びビロードなどであつて、インドに持つて行かれる」

とあるのであるが、(四五) 岩村忍氏の譯によると同じ部分が次の如くなつている。

「バウダックのその都では金絲と絹の多くの種類の布地がつくられる。彼等は非常によくつくられたナスキキ nascici やナック nac やクレモシ Cremosi やそして多くの他の布地、ダマスク織とヴェルヴェットやまた魚類、畜類、そして鳥禽そして他の柄のもの等である。それらのものはインディーに運ばれる」（マルコ・ポーロの研究上卷頁七九）ただし、nascici はナスキキでなく「ナッシーチ」という風に發音すべではないかと私は考えている。

ペリオ氏によれば元朝祕史の naqut は naq（ペルシャ語 nah）の複數形（蒙古語法上の）、načidut はペルシャ語

nasij をうつしたもので、前者がマルコ・ポーロのいう nac にあたり、後者が nascisi (Moule & Pelliot 本の nascici) にあたるという。（藤枝氏前掲論文頁一四六）

ペルシヤ語の形は nasij よりも、むしろ nasīch とすべきであろう。スタインガスはこの語に對し

A kind of silken stuff embroidered with gold

と云う説明を與えている。nasij という形は本來はアラビヤ語であつて、nasaja（織る）という動詞が基になつている。

このナシージュと殆ど同樣の織法によつたナック（nac, nakh）は前述した如く中世ペルシャ語に起源した言葉である。言葉の起源の差は別問題として、織物自體には、一體どこに差があつたのであろうか。

マルコ・ポーロの云う所では、兩者は別種の織物の如くである。彼は內蒙古地方の見聞を記した所でも、（特に今の宣化を中心とした地方の町々村々に回教徒、偶像教徒、キリスト教徒などが住み、交易と工藝で生活していることを述べて）この種の織物をもつくつていたことを傳えている。藤枝氏の譯文によれば（前引論文頁一四五）

「……商業と工業とで生計を立ててゐるのだが、それは、ナスツィスィ nascisi といふ大變上等の金の織物や、ナク Nac〔VB といふ別の織物〕や、いろいろの絹織物を作つてゐるのである。こちらの國にはいろいろの毛織物があるのと同じやうに、そこにはいろいろの金や絹の織物がある」とある。これによると nascisi（正しくは nascici）と nac とは明かに「別の織物」なのである。同じ個所を岩村氏は次の如く譯している。（前引書頁二七二）

「彼等は交易と工藝で生活してゐる。何となればここはナスキキ nascici と呼ばれる非常によい絹と金絲の布地とナック nac（と云ふ種類の布地 VB）と多くの異なる種類の絹の布地がつくられるからである。即ちまさに我々がわれ

われの國に於て多くの種類の毛織物を有してゐるやうに、そのやうに彼等は多くの種々の金絲と絹の布地を有してゐる。」

兩者とも大體、所謂 Moule 輯綴本を基礎として譯しているのであるが、同書の原文を見るにナックに關する所を

…and another kind of cloth which is called nac,…

としてある。これに對する譯文としては、藤枝氏の方よりが正確であると認めなければならぬ。いずれにせよ、マルコ・ポーロが、この二つの織物を別種のものと認めているらしいことには變りはない。

また前掲の元朝祕史の文にもわざわざ兩者を併記して、別々に傍譯を下してある。

一方、元代の漢文史料中からペリオ、藤枝の兩氏はナシージュにあたるものをいくつか見出している。例えば元史（卷八九）百官志の弘州蕁麻林納失失局（元典章卷六吏部にも見える）同書（卷七八）輿服志の天子の冕服の制中の「納石失（金錦）」同じく天子の只孫服（大禮服のこと）の場合の「納石失（金錦）」[四六]等の諸例があり、臣下の場合にも「百官の只孫、冬の服は凡て九等あり。大紅納石失、一。……夏の服は凡て十有四等あり。素納石失、一。……」とある。また葉子奇の「草木子」雜制篇に元朝の官民の服裝を述べて

衣服、貴者用二渾金線一爲二納失失一。

としている。またこの納失失は別に「紅組金」とも呼ばれた如くで、そのことは元史輿服志に「三獻官及司徒大禮使祭服」を記して「紅組金綬紳五」とし、その註に「紅組金は『譯語』に納石失と言う。各々玉環二を佩ぶ」とあるのでわかる。これらの史料はすべて藤枝晃氏が指摘しているが、同氏は更に元史（卷七七下）祭祀志六に天子の喪禮の場合にこ

の品が用いられたことを示している。それによると「輿車には白氈青緣納失失を用いて簾となす。覆棺にもまた納失失を以つてこれを爲る。前行に蒙古巫媼一人を用う。新衣を衣、騎馬し、馬一疋を牽く。黃金を以つて鞍轡を飾り、籠（ツツ）むに納失失を以てし、これを金靈馬と謂う」とある。

藤枝氏の引かれたものの外、元史（卷一二三）塔不已兒の傳に

（至元）五年入勤。帝（世祖）嘉二其功一。賜二白金、納失失段及金鞍弓矢一。

とある。元代の史料を精査すれば、これらの外にも納失失に關する記錄を發見し得るのではないかと思う。

またフランシスコ派の僧ルブルックのウィリヤム William of Rubruck が一二五四年にカラコールムのマング汗の宮廷で nasic を與えられたことは、早くブレットシュナイデル氏の指摘した所である。（四七）

前にも觸れた如くペゴロッティの nacchi が nac (nakh) に、nacchetti が nasīj に當ることはユール氏の說いた所である。（四八）

ユール氏は十四世紀ころの英佛の商業文書にも nachiz, nacīz, nasīs 等の言葉が現われるが、アブール・ファヅル Abū'l-Faḍl のアーイーニ・アクバリー Āīn-i Akbarī（アクバルの制度の義）にはその記載がない點から見て、十六世紀には、すでにナックと共に廢れ去つたものであろうと考えているのである。（四九）

右の如くナツクとナシージュは別種のものとされ、しかも兩者が並び稱されている場合が多いのであるが、元代の中國側資料には前述の如く後者にあたる納石失（納失失）はしばしば現われるが、ナックに當るものは見當らない。藤枝氏も「ナクの方は、意譯した字でも用ひられてゐたのか、詳らかに知ることの出來ないのは遺憾である」と言われた。（五〇）

これに就いて私は一つの考を述べたいと思う。それはナックもナシージュも、ともに絹地に金絲を織りこんだもので、根本的に差異のあるものではなく、兩者混同された場合が多かつたらしいから、元朝では專らナシージュと云う名稱の方が用いられたのではないかという想像である。

この二種の織物に大差がなく、混同された例として左の如きものを擧げ得る。イブン・バットゥータがキプチャック汗國を訪れ、ギリシャから嫁して來ていたそこの可敦 Khātūn の一行に加わつてコンスタンティノープルに赴いたとき「可敦は駒に乘り、五百人ほどの奴隷、小姓、宦者などを召し連れたが、それらは金絲でぬいとりし、寶石で飾つた絹衣をまとつていた。可敦自身はナックともいい、同時にナシージュとも呼ばれる布でつくつたマントを身にまとい、それには寶石がちりばめてあつた」と語つている。(五一) この場合は、はつきりとナックとナシージュの同一物であることを說いているのである。またオランダのアラビザン、故ドズィー R. Dozy 教授も右の二語は同義語であると說明している。(五二)

絹地に金絲を織込んだ金襴織は、本來はペルシャ人によつて盛につくられ nac (nakh) と呼ばれたのであるが、アラビヤ人の大征服後は、これをその言葉で nasīj と呼んだのであろう。ドズィー氏の說によれば nasīj は單に「織物」の義で、正しくは nasīj adh-dhahab wa'l-ḥarīr (金と絹の織物) と呼んだものであるという。(五三) 元史輿服志などに「金錦也」と說明しているのは適譯といわねばなるまい。

本來はナックもナシージュもこれという差別のないものであつたが、後には幾分かの特徵の差を以つて區別されたこともあつたかと思われる。マルコ・ポーロなどが兩者を別種の織物であると考えているのは、そう云う點から來ている

のであろう。元朝祕史の傍譯にはナクド（ナック）を「渾金」とし、ナチドッド（ナシージュ）を「繖金」と譯して區別しているのであるが、その意味は明瞭でない。前掲の如く葉子奇の「草木子」雜制篇には

衣服。貴者用二渾金線一爲二納失失一。

とあつてナシージュの方にも渾金線を用うと說明している。渾金も繖金も等しく金絲を織り交えたものの義ではあるまいか。

隋書に現われる越諾布や諸蕃志の白越諾布をナックに當てる考えが、前述の如く發表されているが「諾」の音は nac にあたるとするも「越」字を何と解すべきであるか、この點に納得しかねるものがある。

第五は「答兒答思 dardas」で繡金と傍譯してある。那珂博士は「總金襴」と譯されたが J. E. Kowalewski の蒙古語辭典を見るに

「tarda」の項に damas parsemé de fleurs, ou de bouquets と譯してある。「花模樣のあるダマスク織」の義であろうか。(五四) マルコ・ポーロの書にもバグダードの特產物中にダマスク織 (damasks) が數えてある。(五五) このものの模樣は、元代には金絲で刺繫してあつたものと思われる。ペルシャ語で「刺繡したもの」のことを zar-dōz といい、zar は「金」dōz は「縫う」の義であるか、それと蒙古語 tarda と何かの關係があるのかどうか不明である。（元朝祕史のダルダスの語尾の s は蒙古語複數の形であろう。元朝祕史にも（每）として複數形であることを示している）

第六は「速不惕」subud と「塔納思」tanas とで、どちらも眞珠を意味する。那珂博士は「眞珠（しらたま）、東珠（おほたま）」としている。いずれも蒙古語の複數形であるが、元史輿服志（卷七八）に天子只孫夏の服には凡そ十有五等ありとして

服(スレバ)ニ答納都納石失ヲ綴ルニ大珠於金錦ニ則冠ニ寶頂金鳳鈸笠。服ニ速不都納石失ヲ綴ニ小珠於金錦ニ則冠ニ珠子捲雲冠。

とある。「答納都納石失」は tanas načiḍuḍ の譯で錦（金襴）に大粒の眞珠をつづつたもの、「速不都納石失」は subuḍ načiḍuḍ で、同じく金襴に小粒の眞珠を綴つたものと解釋される。(五六) Kowalewski の蒙古語辭典によれば tanas（單數形は tana）は「眞珠貝」の意味になつている。しかし昔時は「大粒の眞珠」を意味したことは元史に「大珠」と譯してあることでも明白である。

ペルシャ灣の眞珠採集はよほど古代から行われていたものに違いなく、Arrian の Anabasis (Bk. VII Chs. 19—20) によれば西紀前四世紀にアレクサンダー大王が派遣した三隻のペルシャ灣探險船中の一つはバハライン島 al-Baḥrayn を訪れ、そこの眞珠採集を視察したという。

アラビヤ地理書としては、西紀八七五乃至八八〇年ころに現われたヤークービー Aḥmad b. abī Ya'qūb b. Ja'far b. Wahb b. Wāḍiḥ al-Kātib al-'Abbāsī al-ya'qūbī の書(五七)などが、そのことを傳えたものの中では最も古いものといわれている。

同書にはスィーラーフからシナに至るには七つの海を越えなければならぬとして

「第一はファールス Fārs の海（ペルシャ灣）で……狹く、眞珠の採集所がいくつかある」としてある。(五八) また西紀八五一年ころに書かれた所謂商人スライマーン Sulaimān at-Tājir の「シナとインド物語」Akhbār as-Sīn wa'l-Hind によればサランディーブ Sarandīb (Ceylon) の所で「その附近に眞珠の漁場がある……」と云つている。(五九) セイロンの眞珠のことは宋の趙汝适の諸蕃志に（珠子の項）

「眞珠出二大食國之海島上一。又出二西難・監篦二國一。廣西湖北亦有レ之。但不レ若二大食監篦之明淨一耳。」とある。西難は Hirth 及び Rockhill の譯註書にも示してある如くセイロンで、監篦はスマトラの東岸の Kampar である。セイロンの眞珠については、淸初の谷應泰の博物要覽にも「眞珠所產地」として

一產錫蘭山珠簾沙明珠

錫蘭國中有二珠簾沙一。沙中有二螺蚌沙明珠一。國王命二採珠戶一網取。傾入二珠池一。採レ珠爲レ用。

とあるが、これは果していつごろの事情を傳えたものであろうか。セイロンの眞珠はその採集が中絕したこともあつたらしく思われる。

そのことは他のアラビア語文獻によつて證明することが出來る。卽ち十一世紀前半のアル・ビールーニー Abū'r Raiḥān Muḥammad b. Aḥmad al-Bīrūnī (973—1043) の「インド年代記」Ta'rīkh al-Hind によれば

「昔はサランディーブ（セイロン）の入海には眞珠の漁場があつたが、今では放棄されている。サランディーブの眞珠がなくなつてから、ザンジュ Zanj の國（東アフリカ）のスファーラ Sufāla で眞珠が發見された。それで人々はサランディーブの眞珠がスファーラに移動したのだと言つている」とあるので、(五九) その事情がわかる。西紀一三四四年ころこの地を訪れたイブン・バットゥータは西岸のバッターラ（プッテラム）で良い眞珠が豐富にとれていたことを傳えている。十二世紀中葉のイドリースィー Idrīsī の地理書によれば (Jaubert. 1. pp. 375) ペルシャ灣內には有名な眞珠漁場が三百ほどあつたとある。このものは紅海でも產し、大形の眞珠貝をバルビル balbīl 小形のをサダフ sadaf と呼ぶことが知られている。(六〇) 各地產の眞珠は多くバグダードに集められ、そこで加工されたり賣捌かれたりしていたものと

思われる。そのことはマルコ・ポーロの書に

「そしてインディーからキリスト教の世界に運ばれる眞珠は多くはバゥダックで孔を穿たれるのである」[六一]とあるによつて知られる。西紀一二五九年、元の世祖フビライの使として、フラグ汗のもとに赴き、陷落後間もないバグダードを見たと思われる常德の西使記によれば「產する所の大珠を太歲强（別本には彈につくる）と曰う」とある。[六二]これは大歲彈と云う方が正しいかと思われる。何故ならばペルシャ語で「大粒の眞珠」のことを shah-dāna と云い、歲彈はその音譯ではないかと私には思われるからである。しかし「太」は何を意味するものであろう。「最も貴重な眞珠」を shahwār と呼ぶが、[六三]これを別に durr-shahwār ともいう。durr はアラビヤ語で durrat (a large pearl の義) の複數であるが、ペルシャ語にも入つている。アラビヤ語の durr と、ペルシャ語の shahwār は殆ど同義語であるが、この兩者を併せて一語として使用する場合もある。この例から推して「太歲彈」は或は durr shahdāna の音譯かとも思われるが、假にそうとしてもその音寫法は不完全である。しかし、外國語を音寫するに、その場合と、その人によつて、嚴密に行われない場合も多々あるし、ことに西使記は常德の見聞した所を、更に劉郁が文章にしたものであるから、極めて大體の音を傳えたものという想像もなり立つのである。

第七は Kužügü uṛtus köl ündür tobičaṛud で「頸長く脚高き脫必察兀惕（トビジヤウト）」（那珂博士）または「頸長く脚の高いトビチャクといふ西馬」（小林博士）と譯されてある。語尾の「兀惕」は複數形を示し、單數形は tobičaq であろう。常德の西使記にもバグダード（報達）のことを述べて「所レ產馬名二脫必察一」としてある。Bretschneider によれば長頸のトルコマン馬のことをチャガタイトルコ語で Topchaq と云うとし、R. B. Shaw の "Vocabulary of the Turki

Language" p. 71 に topchaq=long-necked Turkoman horse とあり、十五世紀の Uigur-Chinese vocabulary（華夷譯語）には t'obich'a を「大西馬」と譯してあると云つている。(六四) また小林氏が「蒙古の祕史」中に引用している如く、元の王渾の中堂事記（秋澗先生大全集卷八一）に世祖の中統二年五月八日に上都（開平）にもろもろの外國人の來たことを述べ

「又、一回紇贄(トリテ)ニ栗色宛馬ニ入拜。玉面鹿身、聳立如レ畫。所謂脫必察者也」としている。これらの材料から見ると、オゴダイ等の欲しがつていたのはトルコマン馬であつて、アラビヤの中部ジヤバル・シャンマル、カシム地方等を名產地とするアラビヤ馬のことではないように受取れるが、實際はアラビヤ系の良馬をのぞんだものではあるまいか。

第八は külin-eregüd と darusi-kičidud とで、どちらも「駝名」としてある。那珂博士は「二つとも明本傍譯に駝名とあり、西南亞細亞の特產なる獨峯駝の二種のトルコ語ならんか考ふべし」とした。廣汎な分布地域を持つ駱駝を大別してアラビヤ種とバクトリヤ種の二つとなし得ることは定說の如くで、前者は單峯でアラビヤ、インド、バルチスタン、アフガニスタン、イラン、シリヤ、アナトリヤ、北アフリカ、スーダーン、ヌビヤ等に分布し、後者は双峯駝で中央アジヤのバルフ附近を原產地として、イラン、蒙古、チベット、北支那等に擴まつている。(六五) アラビヤ半島はアラビヤ種駱駝の原產地で、最も優良なものを多數產出し、昔からイラーク、シリヤ、エジプト等にも輸出して來たことはよく知られた事實であり、その產地も半島內各地に及んでいるが、南部マハラ地方のものは特に有名である。中央アジヤ方面では、アラビヤ種とバクトリヤ種との混血も行われたと云われているが、ここに出てくるグリンエレグトとダグシキチドットとは、バグダード方面からもたらされたと云えば、恐らくは那珂博士の考えた如くアラビヤ種の駱駝であろう。これが

蒙古に移されてどう云う結果を生じたかよく解らないけれども、現在の蒙古や北支が矢張りバクトリヤ種の双峯駝の活動舞臺である所を見ると、單峯駝の東方移入もさして大規模に行われたものとも思われぬのである。

最後に ačiran-a qačidud lausasud がある。「駄くる合赤惕都老撒速惕」（那珂）または「荷を積むカチドットといふ騾馬」（小林）と譯され、那珂博士は「明本合赤都惕の傍譯騾名、老撒速惕の傍譯騾とあれば合赤都惕と稱する騾馬と讀みたるなり。これもトルコ語か考ふべし」と記している。騾馬は古くからアラビヤ人に愛用されたことが知られ、マホメットも、晩年は專らこれに乘つたと云われている。また西亞の騾馬を蒙古人が求めていたという事實も興味深いことである。

註

（一）Le Strange: Bagdad during the Abbasid Caliphate, London 1924, pp. 9—10.

（二）Ibid, p. 11.

（三）Ibid, p. 18.

（四）Ibid, p. 17.

（五）Ernst Harder: Arabic Chrestomathy, London 1911, p. 166.

（六）World Almanack, 1955, によれば、イラーク王國の面積は約 171,600 平方哩、人口は一九五〇年現在 5,100,000 に過ぎない。しかし古代にはティグリス河は Sāmarrā より下流、ユーフラテス河は al-Anbār 以下の部分に於いて運河が網の目の如く四通八達していて、多數の住民を養い得たのである。（Encyclopaedia of Islam, Euphrates, Tigris 各項、P. K. Hitti: History of the Arabs, London 1940, p. 349.

（七）Le Strange: Bagdad p. 11.

（八）Ibid, p. 102.

（九）玄奘三藏の長安出發の年次については通說は貞觀三年（六二九）であるが、劉汝霖氏の唐玄奘法師年譜（女師大學術季刊第一卷第三期）の如く、法師の長安發程を貞觀元年八月とする說もあつて、輕率に斷定することは危險である。ここでは、この問題に深入りすることを避けたいと思う。ただ長安出發が貞觀元年ならば、Balkh 滯在は同二年、出發が三年ならば、おなじく四年に此地に來たことは疑のない所である。

（十）H. A. R. Gibb: The Arab Conquests in Central Asia, London 1923, p. 15.

（十一）Ibid, p. 16.

（十二）Yāqūt: Mu'jam al'-buldān (edition of F. Wüstenfeld), Leipzig 1866—73, vol. IV. pp. 817—818.

（十三）Gibb: The Arab Conquests. p. 15.

（十四）De Goeje: Bibliotheca Geographorum Arabicorum, vol. V. pp. 322—324 著者イブン・フアキーフはこの諸國誌を書くに當り、ウマイヤ朝時代の諸資料を利用したものであろうと考えられている。(cf. C. Huart: Littérature arabe, Paris 1902, p. 297). なおこの寺についてはブーヴアの研究が詳しい。L. Bouvat: Les Barmécides, Paris 1912, pp. 25—31.

（十五）Maçoudi: Les Prairies d'or (Arabic text with French translation by Barbier de Meynard and Pavet de Courteille, Paris 1861—77) vol. 4, p. 48.

（十六）Journal of the Royal Geographical Society, 1872, p. 510.

（十七）Le Strange: Baghdad. pp. 243—5.

（十八）Encyclopaedia of Islam, Amīn の項

（十九）Le Strange: Baghdad. p. 325. 10 jarīb=3 acres. 2,133 jarīb=1 square mile.

（二〇）Khāqānī のその詩はブラウンによれば Tuḥfatu'l-'Irāqayn（兩イラークの賜物の義）と題する長詩中に含まれている。(cf. E. G. Browne: A Literary History of Persia, vol. II (3rd Edtion 1920) p. 391.

(二一) Abū'l-Faraj an-Nadīm al-Warrāq: Kitāb al-Fihrist (Edition of Flügel), Leipzig 1871—72, p. 21. Hitti: History of the Arabs, p. 347. 西岸の圓城のベスラ門を出て、チグリート運河を渡るあたりには紙商や書籍店が多く、運河を横ぎる橋上にまで店舗をつらねていた。書籍店のみでも百軒以上あつてスークル・ワルラーキーン Sūq al- Warrāqīn (紙商の市場) と呼ばれていた。(cf. Le Strange: Baghdad p. 92).

(二三) C. Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litteratur, Weimar 1898, vol. 1. p. 479.

(二四) Kitāb al-Fihrist は G. Flügel が校訂し、その後 Rödiger と Müller の手を經て刊行されたもの (Leipzig 1871—72) と、一九二九年カイロで發行されたものとがある。

(二五) Le Strange: Baghdad pp. 267—268.

(二六) Ibid, pp. 268—269.

(二七) M. Reinaud: Géographie d'Aboulféda, (Paris 1848) Tome 1, Introduction p. CXLI. C. Huart: Littérature arabe, p. 202.

(二八) Le Strange: The Lands of the Eastern Caliphate, Cambridge 1930, p. 238.

(二九) Brockelmann: Geschichte der A. L., vol. 1, p. 230. Hitti: History of the Arabs, pp. 364—65.

(三〇) Brockelmann: Geschichte. vol. 1, p. 231.

(三一) R. Croke: Baghdad. pp. 84—85.

(三二) Al-Ya'qūbī: Kitāb al-Buldān (Bibliotheca Geographorum Arabicorum, vol. VII) p. 250. Hitti: History of the Arabs, p. 338.

(三三) Voyages d'Ibn Batoutah, texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et R. Sanguinetti, Paris 1874, vol. II, pp. 105—107.

(三四) Ibn Khallikān's Biographical Dictionary, London 1842—71, vol. 1.

（三五）この邊の解釋は桑原隲藏博士「波斯灣の東洋貿易港に就て」（東西交通史論叢、頁三六七—三七五）に極めて正確に示されている。

（三六）藤田豐八博士「唐宋時代南海に關する支那史料」（東西交涉史の研究、南海篇・頁四四）

（三七）F. Hirth and W. W. Rockhill: Chau Ju-kua, St. Petersburg 1912, Introduction. p. 35. note 3. p. 136, 137, note 2. 石田幹之助氏「南海に關する支那史料」頁一七〇—一七一

（三八）Noyan Churmagun（または Charmaghan）は成吉思汗の親衛隊（ケシヅクテン）出身の武將であつた。(cf. H. Howorth: History of the Mongols, Part III. The Mongols of Persia, London 1888, p. 14—)

（三九）小林高四郎博士譯註「蒙古の祕史」（昭和十六年刊）頁二九八

（四〇）Howorth: History of the Mongols. Part III, p. 14, 15, 20, 21, 35, 43.

（四一）E. Bretschneider: Mediaeval Researches, London 1910, vol. 2, pp. 124—125.

（四二）F. Hirth: Die Länder des Islām nach Chinesischen Quellen, Leiden 1894, p. 42, note 4.

（四三）B. Laufer: Sino-Iranica, Chicago 1919, pp. 495—496.

（四四）P. Pelliot: Une ville musulmane dans la Chine du Nord. J. A. Tome CCXI, 1927, pp. 269—70, note 1.
藤枝晃氏「マルコ・ポーロの傳へたる蒙疆事情」東洋史研究、蒙疆專號（昭和十四年六月）頁一四五以下

（四五）藤枝氏、同右、頁一四六。

（四六）この場合、その後に「怯綿里」として「爾茸也」と說明してある。これがマルコ・ポーロの言うバグダードの特產中のCremosiに當るのではないかと私は考えている。爾茸とは、ケバ立つた織物の義ではあるまいか。Cremosi=Cramoisy は後には專ら緋色のビロードの事となつたのであるが、ユール氏も言つている如く (Yule: Travels of Marco Polo, 3rd Edition, vol. I pp 65—66, note 4) 元來は織方に基いた名で、緋一色ではなく、白、紫、青その他の色彩のものもあつたのである。

（四七）Bretschneider: Mediaevel Researches. vol. 2, p. 125. William W. Rockhill: The Journey of William of Rubruck to

the Eastern Parts of the World. London 1900, p. 185.

(四八) Yule: Travels of Marco Polo, vol. I, p. 85, note 4.

(四九) Ibid, p. 85, note 4.

(五〇) 藤枝氏「マルコ・ポーロの傳へたる蒙疆の事情」頁一四八

(五一) Voyage d'Ibn Batoutah, vol. II, p. 422—423.

(五二) R. Dozy: Supplément aux Dictionnaires Arabes, Leiden 1927, vol. II, p. 648.

(五三) Ibid, p. 666, nasīj の項

(五四) E. Kowalewski: Dictionnaire Mongol-Russe-Français, Kasan 1844, vol. 3, p. 1681.

(五五) 岩村忍氏本、上卷、頁七九。Moule & Pelliot: Marco Polo, vol. I, p. 101.

(五六) Kowalewski の辭典には subat を perle, perle fine としている。

(五七) Ta'rīkh (年代記) と題するものであろう。同じ著者による Kitāb al-buldān (諸國誌) にはこの記錄は見えない。

(五八) G. Ferrand: Relations de Voyages et Textes Géographiques Arabes, Persans et Turks relatifs à l'Extrême-Orient, Paris 1913—14, vol. 1. p. 49

(五九) 'Aḫbār aṣ-Ṣīn wa 'l-Hind, Relation de la Chine et de l'Inde rédigée en 851, texte établi, traduit et commenté par Jean Sauvaget, Paris 1948, p. 4.

なお右の書は卷頭の部分が散佚しているので、ペルシャ灣に關する記載はないが、恐らくはもとはその部分があつたもので、從つてペルシャ灣で最も有名な眞珠採拾のことも記されていたものであろうと想像される。惜しいことに現在巴里の國立圖書館にある稿本が唯一のものであるため、他と校合する事も出來ないわけである。

(五九) E. C. Sachau: Alberuni's India, London 1914, vol. I, p. 211.

(六〇) Richard Le Baron Bowen: The Pearl Fisheries of the Persian Gulf (The Middle East Journal. Spring 1951) p. 165

（六一）岩村氏「マルコ・ポーロの研究」上卷頁七九。この事實は、當時のインド洋方面の貿易の中心となつていたのが、アラブ、ペルシャ系のイスラム教徒であつた事實に合わせて考うべきであろう。

（六二）王國維全集本、古行記四種

（六三）Ghulam Akbar: The New Royal English-Persian Dictionary, Allahabad 1925.

（六四）Mediaeval Researches. vol. I, p. 125, vol. II, p. 140, note 381.

（六五）Arthur Glyn Leonard: The Camel, its uses and management. pp. 95—97.

「續福澤全集」所收福澤書翰二通の發信年について

「續福澤全集」第六卷に收められている左の二通の書翰につき、その發信年が、一通に「年未詳」とあるのは「明治十七年」、他の一通に「明治十六年」とあるのも、これまた「明治十七年」の誤りではないかと思われる。理由はこうだ。

二四五　小幡篤次郎宛　年未詳四月十二日付

六五四　前田助作　清水廣博宛　明治十六年四月十五日付

兩書翰とも、舊高田藩出身の安藤達二なる者にかかわり、前者はその就職斡旋の手紙、後者はこの安藤が鹿兒島の或る豪商のもとに就職していくに際し、斡旋者たる福澤諭吉から安藤の伯父前田、清水の兩人に事情を說明して諒解を求めたものである。

ところで、前者の文中に、この安藤は「先年より本塾に居て卒業昨今は和田の方にて教員たり云々」ということがみられる。「和田の方」とは、和田義郎の塾——つまり今の慶應義塾幼稚舍をさすので、これにより同書翰の發信年が安藤の幼稚舍教員たりし時代であることを推定出來よう。しかも、「慶應義塾出身名流列傳」をみると、かれは明治十六年七月に卒業して翌十七年まで義塾幼稚舍教員をつとめたように記されている。安藤が明治十六年七月の本科卒業であることは義塾保存の「卒業生名簿」でもまた確認される。そして、もし右の記事を信用するとすれば、この書翰の四月十二日附現在で安藤が幼稚舍教員をしていたのは明治十七年に限られるから、その發信年を「明治十七年」とするのはまず差支えないところであろう。

次に、後者は、安藤が幼稚舍教員をやめて鹿兒島へ赴任するときのものなのだが、これも前述の通り安藤の卒業の年から推して、その發信年はむしろ「明治十七年」でなければなるまい。書翰の本文にはもちろんただ「四月十五日」とあるだけであるから、編者の誤記か誤植かではなかつたかと思われる。

それに、改めて二つの書翰を仔細に檢討してみれば、兩者はどうも互いに關連あるもののようで、同じ年の數日を隔てた書翰といえるのではなかろうか。

（會田倉吉）